

# まいこめプロジェクトレポート「収穫編」

～自然溢れる集落で、子どもたちによる自然米作り～



ハルカ:「よし、新人さんもいるからみんなで自己紹介しよう」  
「みんな、まいこめ何回目の参加やる?」  
子ども:「そんな、来すぎて覚えてへんわ!」

「来すぎて覚えていない」子どもたちもいるほど長期の取り組みになってきた「まいこめ」プロジェクト。5年目の今年も無事、収穫の日を迎えることができました。今年は親子あわせて24名の参加で、新田集落の人口は一気に1.5倍になりました。赤ちゃんから長老さんまで老若男女が田んぼに集まる、大変賑やかな1日になりました。



(写真左) よっしゃ～行くぞ～と、まさにイノシシのごとく一直線に刈り込む子ども達。まいこめでは、どんどんクリエイティブに収穫してもらって大丈夫です。(写真中) 兄妹そろって「米とったど!」。5年前は田んぼの泥投げばかりしていたお姉ちゃん。今では弱音一つはかずに米に向き合います。その成長に嬉しくなります。(写真右) こちらも「米とったど!」。田植えから収穫まで一貫して行ったのは今年が初めてかな?是非来年も活躍してほしいですね。

(写真左) 米よりも興味があるのは蛇!長老さんに聞く第一声は「これ食べれんの?」と、どうやら鑑賞用ではないようです。今回は食用ではない蛇とのことで、ペットとして戯れます。それにしても顔…。(写真右) 今回はパピママも活躍してくれました。中には赤ちゃんを抱きながら、両手に米を抱えるパパも。そんなイクメンパパが今回の収穫のMVPであることは間違いないでしょう



(写真左) 小休憩をはさみながら2時間の作業後、無事全ての稲を収穫することができました!

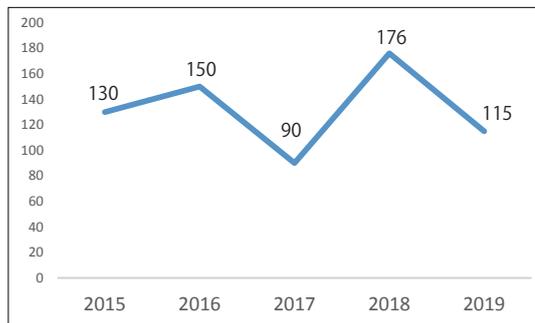
(グラフ下) さて、毎年気になるのは収量…。後日、上田が脱穀のため新田集落にもどり、計量したところ2019年度の収量は115kgでした。2018年度が176kgであったことと比べるとかなりの収量減となりましたが、みなさんはどう評価するでしょうか。

ご承知の通り、肥料は一切使用せず、脱穀後に出る稲ともみ殻を田んぼに返し、あとは土壌中の菌が空気中の窒素を固定し、稲が吸収可能な肥料にするだけです。長老さん曰く、やはり「草抜き」が決め手とのこと。2017年度は草抜きゼロ、2018年度は草抜き2回、2019年度は草抜き1回と、まさに収量の増減に反映されています。

それでは「草抜きに頻繁に来れば、問題ないでないか」という意見もあります。大阪から鳥取への交通費が大人一人で往復6,000円と、なかなか頻繁に通えない事情もあります。そして、まいこめの主眼は教育にあるのであって、農業経営体のような収量増にあるわけではありません。しかし一方で、毎日水管理をし、また米作りにプライドをもつ集落側からすれば、草抜きをせず収量が低いというのは、高い評価をされるものではありません。こうした利害の相違が、まさに都市農村交流において考察していくべき課題ではないでしょうか。

<5年間の収量の変化>

(Kg)



稲刈りが終われば自炊の時間です。今回も集落のおばあちゃん達は不在だったので、子どもたちだけで何とか夕食を準備しなければなりません。料理チームと、飯盒炊爨チームに分かれ、2時間という限られた時間で夕食を用意しました。



食材購入を終え、キッチンに舞い戻る子どもたち。ハイテンションなのはいいが、大きいハマチに、イワシに、豚肉…果たして間に合うのか？



お姉ちゃんに教わりながら、おそろおそろ玉ねぎを切る。こうした世代間の知識の伝承が自然に行われるのが、共同調理の良いところです。



薪を集め、火を炊き、魚を焼き、米を炊いてくれています。小雨も何とせず、力強い火を焚いてくれました。



前回ハマったからかな？今回も大ぶりのハマチを見事にさばき、刺身をつくってくれました。



色々試行錯誤はありましたが、夕食ができあがりました！集落の子どもも交えて、みんなで頂きます。刺身、生姜焼き、イワシの直火焼き、新米のおにぎり、そして新鮮なカニまで並んだご馳走でした。



みんなでメニューを決める段階から、なぜか強く提案されていた炒飯。男の子が家でもよく作るという炒飯を振舞ってくれました。塩のみという味付けも絶妙でした。美味しかった！

## 編集後記 — ただの「自然体験学習」に終わらせないために

収穫当日、子ども達が興味深々に見ていたのが「足踏み脱穀機」(写真左)。その前身であった千歯こきは江戸時代に開発され、この足踏み式は大正時代に発明され、脱穀作業の能率を飛躍的に向上させました。しかし、動力式の脱穀機を経て、戦後にはコンバイン(写真右)に置き換わりました。

この5年目のまいこめでキーワードをあげるとすれば「近代化」の一語でしょう。田植え機や収穫機をいたがる集落の方々に、子どもたちが強く抗うシーンが今年是多々みられました。一方、草抜きや収穫の単調な作業に足腰をやられ「もうちょっと効率的にできないか」とつぶやく子どもたちもいました。

手作業の功罪、機械化の功罪を自分自身の経験としてもてることが重要なのだと思います。社会科の教科書に書かれた「工業化によって、農作業が効率的になり、収量の飛躍的な向上につながった」というテキストを読んで理解した気になっているのと、自分自身の肌感覚でそれを知っていることは根本的に違います。たかが米作りですが、この米作りの経験は、衣服や建築など、他の多くの産業にも適用できる経験であるに違いありません。

しかし「まいこめプロジェクト」にもまだまだ課題が多いです。ただの「自然体験学習」に終わらせないため、体験を知識へと体系的に再編成するような取り組みが必要だと考えています。脱穀の時、長老さんから「本当に子どもたちの教育になっているだろうか」という問題提起がありました。稲作の全てを知っている長老さんだからこそ、非常に核心をついた一言だと思います。6年目を迎える来年は、そうした体験の「意味」を考察し、学校や受験における知識をさらに深められるような仕組みを導入していきたい、と考えています。また、新田集落でお会いしましょう。

食育事業代表 上田 遥

